

雑報

現代言語文学国際協会 (FILLM) 十九回大会(ブラジリア)参加記録

稲 賀 繁 美

国際比較文学会、MLA(現代言語協会)とも密接な関係にある右の学会に、国際交流基金の援助を得て参加することができた。いまさら国際学会の参加報告でもあるまいが、日本からの関心の低下にいささか憂うべき節もあり、ここに簡略にご報告申し上げる。

協会の沿革については省略したい。ユネスコの協賛の下にある学会で、日本からも一九七二―五年に福田陸太郎先生を会長として出していることだけを確認しておきたい。三年ごとの総会にあたる本年は「今日の言語と文化」という総題のもとに、はじめての試みとして、一 現代性(モダニティー)とポストモダニティー(エヴァ・クシュナー教授)、二 全地球的村落(グローヴァル・ヴィレッジ)状況における言語と文化(ピーター・ホーワース教授)、三 意志疎通、「全地球的村落状況下」のテクノロジーと翻訳(ジョゼ・ランベール教授)、四 言語・文学へのインターディシプリナーなアプローチ(ロジャ

ー・D・セル教授)、五 ラテンアメリカの諸文学(ネイド・ダ・ファリア教授)以上五つのサブ・テーマを巡って議論が組織された(括弧内はそれぞれの責任者名)。

それぞれのサブ・テーマについて会期中の一日を充て、集中的に討議するという方式だが、これには賛否両論あいなかった。サブ・テーマによっては、十以上のセッションが同時進行するため、聴きたい発表を聞き逃すケースがあまりに多かったうえ、当初の日程表では三百近くあった発表のうち半数以上の予定者が諸々の事情で参加しなかったため、例によって議場の日程が予定とは大幅に食い違ってしまったからである。会期前にはあらかじめ日程表が印刷されて参加予定者に配付されるというのは、それだけでも画期的な改善だったのだが、世界的な不況に伴う人文系大学のポスト廃止や予算削減、さらにはブラジルの一ヶ月三十パーセントというインフレその他の状況がかさなった。二十年前から提案されながら、政情不安などによって、今回ようやく実現に漕ぎ着けた、南米でははじめてのFILLM大会だっただけに、デ・ファリア夫人はじめとする執行部の苦心には推して余りあるものがあつた。インフラの弱さを克服したハード面についてはまことに完璧な組織であつたが、参加予定者の土壇場での欠席には何とも対処する術がなかつた。

各サブ・テーマでは、午前中に全体集会、午後に分科会とい

う原則で発表が進行した。日程の関係上のつけから私事にかかわり恐縮だが、「ポストモダン」ではアムステルダム自由大学のキベディ・ヴァルガ、ニューヨーク市立大学のヒューズ・シルヴァーマンおよびモンレアル大学のウラディミール・クリシンスキー三教授による全体会での報告をうけて、それにつづく分科会の席上、クシュナー教授からの要請に応じて、日本のポスト・モダン状況での芸術について展望した。今井俊満の「花鳥風月」が芸術家としての創造意志を意図的に宙づりにした伝統的職人芸の模倣によって、モダニズム芸術の批判精神の裏にひそむ装飾嫌悪をオリエンタリズムの批判的内在化によって反論し、草間弥生のオブセッショナル・アートが、家具を「ペニステ状の」形態で覆うというその常同反復の偏執によって、ファロス中心主義の近代美学のからくりを挑発的に暴き、さらに森村泰昌のアプロプリエイションが欧米美術批評界に取り入って市場価格を高めつつ外国での批評機能を予め見越し、そこで消費されることを目論んで計画された戦略であることを、さらにそうした企画をさまざまな意匠として気安く消費してしまう日本社会のポストモダンの性格——伊勢神宮の遷宮にその原型をみる——に言寄せて説明したまでである。

二日目の全体集会は「語学教師」ピエール・ダンシャンの半世紀にわたる体験談が（ご本人は健康上の都合で欠席のため）

代読されたが、前世紀の遺物との評がもつぱら。その激烈な攻撃者の筆頭、天才的悪がきの面影のこるマンハイム大学教授シヤルル・グリヴァルの話が痛快だった。テーマは都市文学とヴァンパイア化現象。都市へと吸い寄せられる人々の生血を吸って生き延びる近代都市のアレゴリーをさまざまな文学作品のなかに執拗に追跡するグリヴァルの舌鋒は冴えわたり、即興の話芸もまことに見事。十九世紀のパリの「都市浄化」が汚辱を下や郊外、よそ者へと転嫁するまやかしの操作でしかなかったことをアラン・コルバン「時間・欲望・恐怖」（小倉孝誠、野村正人、小倉和子訳、藤原書店）を引用し、ゾラの小説『パリの胃袋』そのほか忘れられた傑作をも発掘しながらあざやかに描き出すグリヴァルに、たまたま持参した谷川渥「表象の迷宮」（ありな書房）の受け売りで、日本のヴァンパイア文学について、もひとしきり「日本吸血鬼文学誌」を開陳。

同日には昭和女子大の森本真一氏の発表もあり、聴衆のフロリダ大学リカピート教授の常ながらの日本文学称賛に迎えられるた。同じセクションでトーマス・マンの在米マーカシ旋風コネクションを未公開資料を使って発表した同大学のアレグザンダー・シュテファン教授とそのあと雑談をしていて気づいたことだが、日本の近代化とは何だったのかを、論吉、鷗外、漱石、藤村、天心といったひとびとの明治国家建設との距離の取り方

のうちに読み直すという問題意識の必要性は、こうした国際学会においてこそ鋭敏に感じられる。これらのあらかじめ「作家」となる予定調和の世界にはなかった人々はいかにして国家の事業とは別の私的領域に自律した文学なる世界を虚構としてでも築いていくほかなかったのか。そうした自己疎外によって形成された職業意識にある跼脊の姿は、かれらをあらかじめ現在の制度でしかない「文学」という出来合いの専門領域に括って孤立させてしまう国文学研究に内没しては容易には摺めない。近代日本における「作家」という職業の誕生を問い直し、日本文学研究を日本通だけの閉ざされた領域から解き放ち、芸術家にとっての近代という世界文学の地平において有効な考察対象へと変貌させるためにも、先日来日したピエール・ブルデュエの芸術社会学『芸術の規則』の問題設定は、我が物としてゆきたい課題である。

三日目はテクノロジという標語に災いされてか参加者が少なく、終日全大会に装いを改める。おかげでヴィーン大学のリヒャルト・トラップ教授の、中国における西欧「機器学術用語翻訳上のトラブルに関する詳細な状況報告を耳にすることができ、固有名詞の表記の統一から始めなければならぬ漢字文化圏の豊饒さ無軌道さに興味を示したジョン・ヒリスミラー教授とは、このあと何度も食事を共にして他愛ない笑い話に

興じた。またハンガリー亡命者のサークルによそ者のくせに闖入してしまい、破格のあつかいをいただいて、ラズロー・ゲフィン教授ほか何人かの信頼を得たのも収穫だった。

四日目の全大会の基調報告がヒリスミラーだったが、理論が特定の文化圏の文学に依存して展開されながら、それが国境を越えて異なった適用を受けるという矛盾に着目して、畢竟理論とは読解のひとつの姿にすぎぬ、という地点まで議論をまぜ返して、北米中心の業績作りの口実としての理論信仰の振興をつき崩してみせた脱構築の知的操作は、いろいろと批判は被ったものの、健全な認識といえるだろう（その論法のドゥールーズっぽさには驚かされたが）。

つづいて登壇のバーゼル大学バルツ・エングラは「ポスト・ディシプリナリティー」という刺激的な題名の下に、知識社会学を利用した文学研究者共同体批判に及んだが、ご本人がフアイヤーパーベントの大ファンとおっしゃるにしては、蓮實重彦氏の学者共同体打倒説——つまり通話不可能、理解不可能なものととの闘争状態を是認する立場——とはほど遠い常識的な知識人擁護論に少々当惑。司会のフィンランド、アボ・アカデミーのロジェ・D・セルの巧みな采配ぶり、ややプラグマティックスを教条とするのが鼻につくものの一級品といってもよい理論にたいする批判的学識にも感心。後日遠足の日には半日にわ

たつてこのふたりとたつぷり議論できたのは幸いだった。この程度の英語遣いの日本人が最低何人かは全大会で発議して、学者としての国際的な責務を果たすべきではないだろうか、と思うことしきりである。

午後にはバリ直輸入の発生論的文獻学についての発表（フィリップ・ヴァルマート）から、マドンナとスーザン・ゾンタークとにアメリカ合衆国の文化ヒロインを見定めて、その文化帝國主義を糾弾する短絡の闘士的演説（ジェンティル・デ・ファリア）などが論争を巻き起こし、また中世文学では、双子ができた場合の神学上の困難を社会史や解剖学の知識も動員して詳細にとき、ご婦人がたの嘆声をまねいた発表（ユトレヒト大学教授、エリック・クーパー）など多岐にわたったが、これでは論点を絞り込むのも到底不可能だ。

中日のオフィシャル・ツアーでは、ブラジリアから百五十キロほどはなれた、植民地時代の面影を濃く残すピレノポリスへ遠出。立派な石畳の街路をみてジョゼ・ランベールがほつりと曰く、「この町は植民地時代のほうが脱植民地時代より豊かだったんだな」。

五日目はポルトガル語の発表ばかりなので、ふまじめな外国人はグループに分れてまた遠出。水晶採掘でできた町クリスタリーナにいったみたが、露天堀りの跡に水晶の破片が一面に輝

く赤土のサヴァンナの凸凹道を三十分も車で揺られると、ドライヴァーのひとたちも初めてという滝が開け、水先案内の宝石細工師のおにいさんとともに滝壺へダイヴィング。水浴ずきにはたまらない楽園だ。

最終日はポール・ズムツール教授の司会でパネル・ディスカッション。マドリッド大学のジョゼ・ディアス・ボルク教授の発表はスペイン語ながら当方にも完全に解読可能な国際語による現代批評理論の総括的復習。つづくコインブラ大学の碩学ジョゼ・G・ヘルクラノ・デ・カルヴロ教授のソシユール批判は闇夜になんとかの類で、老師の英、仏、伊への通曉ふりはわかるだけに少々無残。つづく自由討議ではキリスト教の普遍主義個人主義に^{コリン}の将来を託すエヴァ・クシュナーの発言に疑問を感じて、では非キリスト教信者はどうするのですか、中国では人権を個人の権利と考えるのは今日でも異端な危険思想なのですが、と発言してみた。

これはズムツール会長も指摘したことだが、過度に技術化した学術手法によって研究対象を把握しようとする西欧の科学志向には昆虫採集にも似た死体愛好の態度がある。対象の所有^{avoir}に通ずる知^{savoir}を脱却するためには、対象を固定し解剖して分析のうえ分類しようとする嗜好を改め、そもそも西欧の知の営みがいかなるものなのかを見つめなおす^{savoir}こと

が、人文学のカノンの議論のうえではどうしても必要なはずだ、といった提言をヒリスミラーも引用したポール・ド・マンの文章などを活用して開陳したまでだが、幸いズムトール教授からは格別の賛同を表明していただけた。

夜の部は大統領府にお呼ばれやら、ブラジリア大学の学生によるサリヴァンの『訴訟』観劇やら、テレヴィ塔展望台でのパーティーやらとなかなか忙しく、人造湖のほとりでの麗人との対話やサンバで午前様になった記憶も悪くはない。ゾラについて論じているうちにしまいには一緒に踊ってしまったデ・ファリア夫人の細き腰元やら、レストラン専属の(?)元気なお嬢さんのたくましい胸元など、言及するのも憚られる。山のような御馳走は歓迎しているうちに悩まされるに至ったが、なにせ宵越しの金があれば食事に散財するお国柄。

閉会式の宴はもうそんなに人数も多くはなく、たがいに知り合い同士といった親密さが嬉しかったが、ズムトール教授の八十歳にして人前でははじめてというポルトガル語の演説も見事なら、次期会長に選出されたジンバブエのアモノ教授の即興のフランス語演説もさすが外交官ならではの目配りとユーモアに溢れて好対照をなす。執行部をつとめたデ・ファリア夫人の演説もそれは妖艶で、こればかりは日本人には真似できないな、と改めて埒のあかぬ感心をする。会長指名を晴天の霹靂とする

アモノ教授からはなぜ日本人の会長が選ばれないのか、日本にこそ世紀末の「ユニクス」運営を委ねるべきなのに、などと就任受諾演説で公言され、困惑。この種の国際会議で最低限の国際的責任を果たさないと、日本はますます世界の孤児になる。優秀な諸先生、諸先輩のご尽力を切に望むばかりである。